

2018年

5月10日
第314号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

志を引き継ぐ

園長 児嶋草次郎

みなさんは、柿原政一郎という人を知っていますか。この石井記念友愛社にとっては恩人と言える人です。昭和20年、石井十次の理念と事業を永久に記念すること、戦災孤児を救済することを目的に、石井記念友愛社として児童福祉事業が再開されたのですが、実質的な創設者は、当時、広島と宮崎を拠点に実業家として活躍されていた柿原さんでした。

私の父児嶋虜一郎を説得し(結婚式の仲人も柿原さんでした)、導いたのです。私の父は石井十次の孫であるとは言え、岡山で画家児島虎次郎の長男として生まれ育ち、全く岡山孤児院との関わりもないままに大学卒業し、たまたま昭和20年に高鍋で兵役を終えたのを、柿原さんはチャンスととらえたのでしょう。柿原さんの御膳立てで、この世界について何も知らない父は児童福祉事業に身を投じることができたのです。

後に柿原さんは、その著書『石井十次』の中で、「祖父十次先生の霊が、彼に何を告げた事か。」と他人事のように書いておられます。広島では原子爆弾をあげ、敗戦後の混乱の中で多くの浮浪児を見た柿原さんこそが、石井十次の弟子として、いてもたってもおれなくなり、児童救済事業を再興すべしという石井十次の霊示を感じたのでしょう。

今「石井十次の弟子」と書きましたが、石井十次とは18歳違い、親と子ほどの年齢差があります。石井十次は、児童福祉の開拓者です。それを世界的スケールでやりました。柿原さんは、その石井の後姿をじっとあおぎ見て、ある時は右腕として働きました。さきほどの『石井十次』では、「最も身近かに石井十次先生を強く心印に刻銘している。」と振り返っておられます。

柿原さんには、もう一人師事した人がおられます。岡山倉敷の大原孫三郎氏です。大原氏は石井十次の心友であり支援者で、紡績会社の社長でした。柿原さんは大原氏より3歳下です。大学中退後石井の命で大原氏に仕えるようになり、やはり時にはブレーンとしても働きました。

この二人の巨人に仕えたことが、柿原さんの人生を決めたと言ってもよいでしょう。石井十次は社会事業家として、大原氏は実業家として業績を残し、社会的評価も受けましたが、柿原氏は若い時常に2人に寄り添い、その精神や事業のノウハウの表も裏も見て学んだだけに、マルチ事業家的なスケールを身につけました。おそらくこれだけ枠を越えて幅広く活躍し、また精神的にも大きな器を持った人は、大正・昭和時期の宮崎県には他にないでしょう。宮崎県の誇るべき偉人です。残念ながら、正当に評価されているとは言えません。

そう言えば、石井十次と同じように柿原さんの精神を支えた人をもう一人あげておかねばなりません。「児孫のために美田を買わず」という言葉を遺した西郷隆盛です。時代が少しずつ直接師事することはなかったけど、父方母方両方の祖父が西南戦争の田原坂の戦いで西郷軍として亡くなっており、西郷さんへの崇敬の念は尋常ではありませんでした。

さて今回は、政治家としての側面から見た柿原政一郎さんの主な業績をあげてみます。

まず大正9年36歳で衆議院議員（宮崎県第一区）になります。当時不景気に突入しており、地方経済は（特に養蚕）はあえいでおり、郷里高鍋町民の強い要請で出馬したのです。その頃柿原さんは、大原氏の秘書から大原関係の新聞事業に転身していました。岡山を拠点にした「中国民報社」を、四国にまで拡大（「四国民報」）しつつある時でした。ちなみに、この新聞社はその後他社と合併しながら現在の「山陽新聞社」へと発展していきます。

国会議員と言え、石井十次も一時期、国政レベルで社会事業をやろうと考え大原氏に相談したことがあります。その時は、健康が持たないと判断した大原氏が引き止めています。柿原さんの思いの中には、「オレがやってやる」という義侠心もあったのでしょうか。ところが、東京に行ってみると、国会は階級社会。4年間で愛想を尽かしてしまいます。もちろん地元養蚕事業のために奔走しました。

次に柿原さんに与えられた政治の舞台は宮崎市長です。昭和10年52歳の時、宮崎市議会が満場一致で柿原さんを勝手に選任したのです。（戦前は議会の多数決で決めた）。宮崎市役所内で職員による集団横領事件が発覚。市長、助役、収入役が辞職、市議会も解散選挙という事態となり、混乱を収束させる切り札として柿原さんが招聘（しょうへい）されたのです。天皇陛下の行幸（視察に来られること）も迫っており、「救世主」として射止められたわけです。この時特使としてお願いに行った人が、宮崎交通社長の岩切章太郎氏でした。

当時柿原さんは、生活の拠点を広島市に移し、地元の大地主の田中家と組んで広島臨港土地株式会社を創設。広大な土地を理想都市に生まれ変わらせようと開

発工事に燃えていました。この広島では、田中家の創立した「広陵高校」や「財団法人宇品学園」（保育所）の発展も支えています。

宮崎市長（報酬辞退）になった柿原さんは、天皇の御巡幸の案内役としての大役をはたすと、市政の刷新、産業の発展、文化の推進に取り組みます。「しいたけ飯」は柿原さんの発案で、「ひえつき節」や宮崎神宮の「やぶさめ行事」の復興は、柿原さんの声かけによるとか。

普通であれば、二選三選と市長職に執着しようという欲も出てくるのですが、柿原さんは違いました。大きな課題に直面するのです。電力会社と宮崎県との間の覚書（契約）が宮崎県にとって非常に不利で、これでは宮崎県に会社を誘致しようとしても電力不足で不可能であるということに気付くのです。

そこで柿原さんが考えたのが「県営発電所」設置です。児湯郡地域の県会議員補欠選挙に市長在職のまま立候補し当選（昭和 12 年 53 歳）。市長は途中で投げ出します。議会をまとめ県知事とも連携し合い、昭和 15 年川原発電所等として実現します。

この奮闘する柿原さんを地元高鍋町民が放っておくはずもなく、今度は町議会が満場一致で柿原さんを町長に推挙。今ではありえないことですが、県議会在籍のまま、無給の「名誉町長」としてその後獅子奮迅の活躍をされます（商工会の会頭も 1 年間兼務）。この頃の功績のいくつかをあげますと、高鍋町と上江村の合併。上江村の根強い反発を説得しています。アルコール工場や鉄興社工場の誘致です。これは少し時代がさかのぼり国会議員時代の話ですが、現在の旭化成を高鍋に誘致しようとしたエピソードも残っています。その創業者野口遵（したがう）は、広島で化学工業を起す計画であったのにうまくいかず、その時広島にいた柿原さんが説得して宮崎に連れて来たというのです。結局延岡市に落ち着きましたが、柿原さんの本音としては高鍋に設置させたかったようです。この柿原さんの功績については、延岡の前市長もある時聞いたら知りませんでした。

その後柿原さんは町長をやめ、県会議員に再選され（昭和 14 年）、議長ともなります。昭和 17 年県議会辞職。

太平洋戦争は昭和 16 年から昭和 20 年です。敗戦で日本各地が焼け野が原となりますが、高鍋町も疲弊し再スタートすることになります。しかしこの窮乏を打開できるのは柿原さんしかいないということにまたなり、再度白羽の矢が立てられるのです（昭和 25 年 67 歳）。請われたら断れないのが柿原さんであり、愛する郷土高鍋のために最後の奉公として 2 期、昭和 32 年 11 月まで（74 歳）勤めました。そしてその 4 年後、すべてのエネルギーを使い果たしたかのように、静かにこの世を去っていかれました。

その最後の奉公とはどのようなものか。幼少の頃からの友人である元住友化学社長の吉田貞吉を呼びかえして、南九州化学工業株式会社を設立するなどの産業振興にも力を入れますが、心境としては、西郷の「児孫のために美田を買わず」の世界でしょう。敗戦時からそう心に決めたようです。

昭和 20 年に、石井記念友愛社を設立したことは先に書きました。次にやったのが、「財団法人正幸会」の設立（昭和 23 年）です。新富町にある父正一の遺産の大半を資金とし投げ出し、高鍋町の歴史的文化遺産である明倫堂文庫を守り、図書館を私費で作し、この地方の文化教育の振興に寄与しようとされたのです。昭和 30 年に図書館は開館、町に寄付。町長をしながら図書館長も兼務し、俸給は図書購入にあてるなどの熱の入れようでした。

こうして政治家としての柿原さんを振りかえると、ほとんど地元の有志から強い要請で引き受けています。計画的な出馬ではなく、おそらくどれも身を削るような戦いであったことでしょう。ですから、役を終えたと判断すると未練もなくさっと身を引いてしまうところが柿原さんらしいところです。心に期する信念がなければ、このような人生姿勢はとれません。

柿原さんの本業は実業家であったのですが、あまりにも幅が広すぎて、その事業は枚挙にいとまがありません。最初は大原孫三郎氏の下で働き始めましたが、その後その枠を越えて縦横無尽に活躍されます。しかし、石井十次と大原孫三郎氏への忠誠心は生涯持ち続けました。そういうブレない日本人魂は、まるで日本武士のようです。後に宮崎交通の岩切章太郎氏は次のように評しておられます。「公共のためなら己を捨てて奉公しようというのが柿原さんの信条であった。」（『柿原政一郎』財団法人正幸会）。

石井十次もそうですが、柿原政一郎さんのような傑物（けつぶつ）は少年時代どう育ったのか、非常に興味が湧きます。単なる秀才はどこにでもいますが、柿原さんのような器の大きな偉人は、おそらく 100 年に 1 人くらいの割合でしかでないでしょう。この宮崎県から再び柿原さんのような人材を輩出したいと願うならば、その育ちをしっかりと検証してみる必要があります。

柿原さんを語る時、忘れてならないのは、父正一（まさかず）の存在です。高鍋町に下級武士の子として生まれ（1864 年）、石井十次より 1 歳上で同時代を生きます。正一の父正幸（柿原政一郎さんの祖父）は石井十次の父親と同じように西南戦争田原坂の戦いに参戦し、不幸にも命を落としてしまいます。正一 13 歳、弟正次 6 歳の時です。母親はその 3 年前にすでに病死しており、兄弟二人は祖母に育てられました。高鍋島田小学校を卒業すると代用教員をしながら晩翠学舎という私塾でも学びます。この頃石井十次との交友もあったと思われます。16

歳で石井十次のいところになる田中きみと結婚。長男政一郎が生まれたのは18歳の時（明治16年）でした。ちょうど宮崎県が再置（鹿児島県より独立）された時で、それを機に宮崎県庁に就職。石井十次の父親も宮崎県が設置された時に県庁に奉職しています（鹿児島県に併合された時点で退職）ので、無難な生き方としてその選択は理解できます。

しかし、その後、大阪府へ転勤を繰返したり、同郷出身の鈴木馬在也を頼って住友の四国新居浜工場に勤務したり。一方において高鍋町の隣町新富町湯風呂地区に広大な土地を確保して、開拓事業を起こし、四国からの移住者を招き入れたり、不可解な行動を取るのを私は不思議に思っていました。

今回柿原政一郎さんのことを書くにあたって、『柿原正一』（竹本哲子）を再読し、ようやくその行動について納得出来た気がします。志（こころざし）は石井十次等と同じだったということです。

明治革命後、近代国家に脱皮すべく、政府は地租改正を進めながら殖産興業策を推進したのです。当時一日も早く欧米に追いつこうと、文明開化が国民の旗印となったのです。若者たちは、それぞれに自分も国のために何らかの貢献をしたいという大いなる志（こころざし）を抱いて、社会に挑戦していきました。学校教育制度も確立されていき、富国強兵も呼ばれました。

「殖産興業」の一つが開拓事業であり、正一は天命としてその「開拓」を選択したのです。その資金を作るために、転々としたわけです（ちなみに弟の正次はアメリカに渡り活躍しています。）その親の後姿をじっと見て育ったのが長男政一郎さんでした。正一にとっては、一人っ子である政一郎さんの教育も非常に重要でした。四国に赴任したのは「息子の学費をかせぐのが目的」とも『柿原正一』には書いてあります。

ここからが政一郎さんの育ちです。明治16年、高鍋町道具小路に生まれます。下級武士の家系で江戸時代は鷹匠（たかじょう）であったとか。明治31年（14歳）高鍋学校（初等中学）を卒業し、宮崎中学校第四学年に編入。

ここに、明治30年に写された1枚の写真があります。高鍋教会堂（キリスト教）を前に14名の男性が集合した写真です。『石井十次日誌』を見ると、6月13日（日）に「会堂前にて写真を撮る」とだけ記されてあります。もちろん石井十次も写っている（高鍋に岡山より帰省中）のですが、その前にしゃがんでいる少年がどうも柿原少年です。

柿原さんにとって石井は母親がいとこ同士という関係であり、柿原さんがあこがれのおじさんの前に腰を下ろそうとしたのは自然な流れです。頭の骨格もよく似ています。今の所証明する記述はないのですが、私は確信しています。高鍋学

校生、14歳ということになります。ちなみに父親正一の弟正次もアメリカから一時帰国中で、一緒におさまっています。

宮崎中学を卒業すると、石井十次のいる岡山の第六高等学校工科を受験するも失敗。当時は試験は7月でしたが、次の年1月からは石井十次を頼り岡山孤児院内に泊り込んで受験勉強し、今度は哲学科を受験して合格（明治34年18歳）。岡山孤児院で孤児たちと寝食を共にしながら、第六高等学校に通います。そして3年後、進んだ大学は東京大学哲学科でした。おそらく石井十次と身近に接する機会も多く、その人生姿勢において大きな影響を受けたと思われます。

ここにもう1枚の写真が残されています。岡山孤児院内で取られたもので、前列には孤児と思われるまだ幼い子供たちが5人腰かけ、中列には大人と少女5人が腰かけています。そのうちの3人は、石井十次の長女友、次女震子、三女基和子です。後列には6人の大人が立っています。右端が石井十次、その隣が妻の辰子。そして、一番左端に学生服姿の柿原さんが石井十次と同じ坊主頭で立っているのです。おそらく六高時代に取られたものでしょう。精悍（せいかん）な面構えです。なぜ柿原さんが最初工科をめざしていたのに哲学を学ぼうと思うようになったのか、この写真1枚をじっとみていると分かるような気がします。

後年72歳になった柿原さんが、人生の転機となった岡山孤児院での生活を振り返りながら次のように書いています。

「自分は何のために生まれたか、何をすべきか、人生の意義は何か、社会国家は何のために存在するのか、この疑問から人生哲学に入る。高校を終え大学に入っても、一向に人生哲学は解けない。」

「終生を社会事業と社会問題とに投入した。時には政治的線路内に迷い込むこともあるが、私自身は終始一貫社会問題と取り組んでいるつもりだ。」（『柿原政一郎』）

小さい時から秀才として回りからも一目を置かれ、親にも大事に育てられた政一郎さんが岡山孤児院の孤児たちと生活を共にするようになり、どれほどの衝撃を受けたことか。最初工科をめざしていたということは、住友などの近代産業系の会社に入社しての立進出世を夢に描いていたに違いありません。ところが全く別世界が岡山孤児院内には存在した。全国各地の見捨てられた子供たちを救い集め、彼ら一人ひとりに尊厳を見出し、可能性と未来を信じて教育することに最高の価値を置く。全く無私（むし）の精神で身をけずるように石井十次は孤軍奮闘している。十次の娘たちも孤児たちと一緒に生活しながら、必死に生きようとがんばっている。価値観の転換がおきるのはやむを得ないことでしょう。

柿原さんはここで勉強にも真剣（まけん）に取り組みます。同じように高鍋から岡山孤児

院に寄宿して学んでいた松尾春年氏の話しでは、「六高では入学時も卒業の際も主席、東大入学のときも主席だった」とか（『柿原政一郎』）

私たちは、柿原さんを政治家・実業家として見て来たわけですが、その原点は常に岡山孤児院にあったのであり、その視線の先には、社会問題があったのです。ここに来て、私の父にこの茶臼原の児童福祉事業をさせようとした意図も分かるような気がします。柿原さんは石井十次から引き継いだ志を、大原さんと同じように、ある意味もっと科学的に広く社会的に実践しようと試みたのだとも言えます。もしかしたら、多くの人達が柿原さんを間違っているとらえていたのかもしれませんが。

その志を私たち宮崎県人はどれほど理解し、また 10 分の 1 でも 100 分の 1 でも引き継いでいこうとしているのか、この時代の大きな節目に自らに問いかけてみなければなりません。この志を次世代に引き継いでいくために、今後「柿原政一郎顕彰館」もぜひ必要でしょう。